

天文民俗調査報告(2019年)

北尾 浩一*

概要

1979年3月に沖縄県宮古・八重山の調査を行なったところ、星名伝承、星見石について多くの課題が出てきた。数年以内に再調査の実施を考えていたが、再調査は2019年になってしまった。また、未調査地域である岩手県、山口県見島等の調査の実施も2019年になった。本報告は、ようやく実施できたこれらの地域を含めて日々の暮らしのなかで形成された星名伝承について、報告をさせていただきます。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめから42年目になった。調査を実施した地域は、「東北地方」「北陸地方」「東海地方」「近畿地方」「中国地方」「南西諸島」である。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は大正15年生まれ、最も若い伝承者は昭和36年生まれであった。なお、星名とともに星見石を疑う立石についても調査対象とした。

2-2. 調査地

2019年は、次の38箇所で開催した。

- ・3月…宮城県気仙沼市大島、山口県長門市通(青梅島)、萩市見島
- ・4月…静岡県伊東市新井
- ・6月…石川県加賀市橋立漁港
- ・8月…岩手県宮古市鯨ヶ崎、田老、下閉伊郡山田町船越田の浜、普代村、田野畑村、上閉伊郡大槌町赤浜、沖縄県宮古島市荷川取、池間島、来間島、伊良部島、大神島
- ・9月…山口県防府市野島、岡山県倉敷市大室漁港
- ・10月…沖縄県糸満市喜屋武、糸満、うるま市勝連(浜比嘉島)比嘉、浜、兼久、国頭郡伊江村(伊江島)、国頭郡本部町浜崎漁港、本部町渡久地港、大宜見

村塩屋漁港、根路銘、国頭村辺土名漁港

- ・11月…沖縄県宮古島市松原、下地、城辺保良、池間島、伊良部島
- ・12月…沖縄県石垣市、八重山郡竹富町竹富(竹富島)、西表祖納(西表島)、和歌山県有田郡湯浅町

3. 各地域の星名伝承

2018年に記録した特筆すべき星名伝承は、次のとおりである。

3-1. 東北地方

岩手県、宮城県の調査を実施した。

(1) 岩手県上閉伊郡大槌町赤浜

話者(昭和9年生まれ、山田町船越出身)が伝えていたムジラはプレアデス星団ではなく、オリオン座三つ星と小三つ星であった。プレアデス星団は、オクサと呼んでいた。オクサに続いてのぼるアルデバランとヒアデス星団でつくるV字形をサンカクと呼んだ。「オクサ、ごじゃごじゃと星がかたまったのが上がってくる。オクサ、サンカクが上がる。必ず星の出、イカつく。オクサ、ぐざぐざとなっているからオクサ。かたまっていることをぐざぐざ」

(2) 宮城県気仙沼市大島

2014年に話者(昭和2年生れ、大島出身)より、ムジラボシとヒシャクボシの俚謡を記録した。(北尾 2015) 2019年の調査では、オリオン三つ星と小三つ星(ムジラボシ)を両親と子ども4人に見立てた俚謡を記録することができた。

「よいよいよいとさ、はあー空に輝くムジラボシさまでさえ、は、よいよい、わたしあなたとかわい子4人のこらしやのしよ、よいしよ、あーめでたいなめでたいな 幸せ

*中之島科学研究所
starlore_kitao@yahoo.co.jp

いっぱいとんでこーい〜 はーよいよいよいとな、みんなで歌って踊りましょう、沖は大漁、日はよいし、風は南で船はたつ、よいよいよいとな、よいよいよいとな〜」

話者は、「むづらばしの歌いうのは星のきらめきもそうですけど、やっぱり一家の幸せに、船に行つて旦那さんがいない、独身同様の、未亡人同様の生活が長い、この大島のおなごにとれば、せめてそういう席でおおつぱらに歌うということが自分の心をなぐさめたのかしれません」と説明してくださった。



3-2. 中国地方

(1) 山口県防府市野島

2012年8月、福武財団の瀬戸内海文化研究・活

動支援助成で訪れたとき不在だった山口県防府市野島の話者(昭和7年生まれ)を訪ねた。同行の古屋昌美氏によりゴンタロウボシの歌の映像を記録した。なお、録音の聞き取りは古屋昌美氏による。

「やーれ、うーえのへーやの田一植えにーは 二言全くゆくまいーぞーななつやめかとおもうたらーば ゴンタロウボシをおがませーた」

上の田んぼの田植えには、二度と行くとは言わないよ、ななつ(午後4時)に終わるかと思えば、ゴンタロウボシ(アルクトゥルスと思われる)を拝まれた(拝むまで仕事をさせられた)という意味である。



(2) 山口県長門市通(青梅島)

話者(昭和13年生まれ、青梅島通出身)は、スマル、オオボシの出をイサキ、タイがつく(釣れる)目標にしていた。

「夜中過ぎて、夜明けの3時、4時頃にね、オオボシって大きな星が出ますよ。2時過ぎ頃ですかね。それから4時、3時過ぎくらいになったらスマルって7つ小さな星が、7つこう日本列島みたいになって、あれが出たら3時半頃で、それからずーと夜が明けますけどね。そのオオボシとスマルが出たら、魚がものすごくさわざですのですよ。魚のくいつきがよくなりますよ。1時間か1時間半ほどしたら夜が明けますから。魚なんかいうものはね、自然がよくわかるのですよ。おやじとイサキつりにいって、夜中ずっとやるでしょ、オオボシとか、スマルやら、必ずスマルという星が出たら、夜明けの何時間か前だから、タイがよく食いつきだす。おもに夏、イサキなんかは夏場ね。6月から10月までの間です」

スマルは、「7つ小さな星が、7つこう日本列島みたいに」という話者の説明からプレアデス星団であろう。話者は、オオボシが出るのが3時、4時頃と言ってから2時過ぎと言いつ直した。また、スマルが出るのが4時、3時過ぎと言ってから3時半頃と訂正した。オオボシのぼるのが2時過ぎ、スマルが3時半頃だとすると、スマルの約1時間半前にオオボシが出ることになる。カペラでなく、フォーマルハウトであろうかと思ったが、話者に、「オオボシいうのは大きいですか」と尋ねると、「けっこう、大きいですよ」という答えが返ってきたことから、おそら

く違うであろう。順番、出る間隔の記憶が定かでなく、アルデバランかシリウスの可能性を疑う。

(3) 山口県萩市見島本村

古屋昌美氏同行で、話者(昭和16年生まれ、見島本村出身、男性)より聞き取り調査を実施した。録音の聞き取りは古屋昌美氏による。「スマルボシ、聞いたよ。夜明けに上がる。三角みたい。星がいくつかぼつぼつ。夜明けのミウジョウより前に見える。夜明けにはよう出る。スマルが先、スマル(星が)6つはある」

話者の場合、星の出を魚が騒ぐ目標としていなかった。

3-3. 南西諸島

沖縄本島、浜比嘉島、伊江島、宮古島、池間島、大神島、来間島、伊良部島、石垣島、竹富島の調査を実施した。

(1) 沖縄県糸満市喜屋武(きゃん)

友利健氏の案内で、話者(昭和9年生まれ、糸満市喜屋武出身)より、ユーアカブシ(明けの明星)、サンユシブシ(オリオン座三つ星)を記録した。ユーアカブシについて、「ユーアカって大きな星が上がってくる。だいたい4時くらいから上がってくる。ユーアケ(夜明け)の4時、5時くらいから上がってくる。あれが上がってきたらユーアケます。ユー明けてくるのです」と、サンユシブシについて、「3つ並んで、サンユシブシ言って。サンユシブシ、3つがサンでしょ。3つ星がサンユシブシ」と語ってくださった。「ユシ」がどのような意味かはわからなかった。縦に3つ並ぶか確認すると、「横にも並ぶ、縦にも並ぶ」という答えがかえってきた。星がごじゃごじゃしたのを聞いたことがないか尋ねると、「あれはブリブシ」という答えがかえってきた。

(2) 沖縄県国頭郡国頭村辺土名漁港

友利健氏の案内で、話者(昭和19年生まれ、うるま市石川出身)より、ユーバンマンジャープシ(宵の明星)、ユーアキブシ(明けの明星)を記録。ユーバンマンジャープシについて、「ユーバン(夕飯)、マンジャー(食べたいなあ)、ブシ(星)。夕食、食べたいなあーと言っているような、欲しがっている星」と伝えていた。

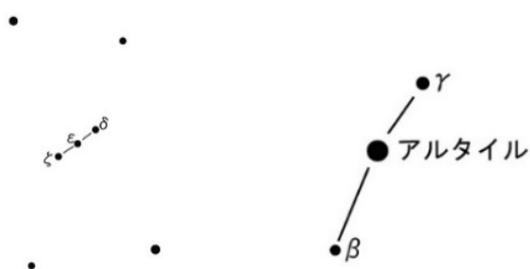
また、ニヌファブシを常に見て方角を知っているわけではなかった。コンパスだけ見ていたら疲れるから、あの赤っぽい星をあてようか…というように、めあてにする星の名前はついていない。次は、あの星をまたあててみよう。ちょっとずれている。次はあの星あてて、というように、めあてにする星を変えていった。ブリブシについて、「天の川だろう。星がいっぱい群れている」と伝えていた。天の川が星の集まりであることは伝承で形成された知識ではないが、天の川が雲のような帯であることをいっぱい群れていると表現した可能性があるのでは

なかろうか。プレアデス星団をホーキボシと呼ぶ星名形成がされている地域があるように、雲のような天の川と結びつけたのであろうか。

(3) 宮古島市城辺保良

1980年代に実施したアンケート調査においては、アルタイルとβγの星名として、ウスウマサダティブス(牛馬サダティ星)を記録した。牛と馬を連れている星で、サダティとは「連れる」という意味。沖縄県平良市(現 宮古島市)に伝えられていた。(北尾 2018)

ところが、11月に記録したウシウマサダチは、いちばん上が牛、真ん中が人間、下が馬で、秋にのぼる三つの星であった。同じ宮古島でオリオン座三つ星とわし座アルタイルとβγの見方を記録することになった。



保良

平良

また、俚謡を通して社会で共有され世代を超えて伝えられた。宮古島保良で伝えられている歌は、空(太陽)と川との心意のなかの連続性を意味しており、星(天体)だけを見るのではなく、山、川、海等と合わせた景観として、捉えたことを示している。



「アガスチダヤ ヤスムスガ(上がる太陽は休むが)ボラガー(保良川)ノミズ(水)ダヨ ヤスムティノコトヤニャンヨ(休むことないねー)」(話者生年、大正15年)

4. 特筆すべき星名伝承

4-1. プレアデス星団ではなくオリオン座三つ星(小三つ星を含むケースもある)を六連星と呼ぶことについて 江戸時代の方言辞書『物類称呼』(越谷吾山著、

1775年)には、「江戸にては〇むつら星といふ」とある。プレアデス星団を、六つの星が連なっている様子と認知して六連星(ムツラボシ、ムヅラボシ)という星名が形成されたのである。プレアデス星団を六連星(ムヅラ等に変化)と呼ぶケースは次のように広く記録できる。

●ムヅラ、ムツラ

- ・青森県上北郡六か所村泊…ムヅラ
- ・秋田県男鹿市戸賀…ムツラ
- ・秋田県男鹿市塩崎…ムヅラ
- ・秋田県男鹿市加茂…ムヅラボシ
- ・茨城県北茨城市大津町…ムヅラ
- ・群馬県利根郡みなかみ町藤原…ムツラ(北尾2018)

ところが、宮城県気仙沼市、岩手県大船渡市ではオリオン座三つ星(あるいは小三つ星を含む)を意味していた。気仙沼より北の地域においても、オリオン座三つ星(小三つ星を含むケースもある)のムヅラ系の星名が記録できるかどうか、調査の空白地域になっていた。

本調査によって、その空白地域においても、六連星(ムヅラ等に変化)がオリオン三つ星(大槌町赤浜のムヅラは小三つ星も含む)を意味する星名が記録できた。

- ・岩手県下閉伊郡田野畑村…ムヅラ
- ・岩手県上閉伊郡大槌町赤浜…ムヅラ

プレアデス星団については、大槌町赤浜の話者は、「オクサ。ごじゃごじゃと星がかたまったのが上がってくる」と説明してくださった。オクサは、岩手県下閉伊郡普代村においても記録できた。また、石橋正氏は、宮古市田老漁港、石浜漁港にてオブサを記録した。一方、宮城県本吉郡唐桑町(現 気仙沼市)では、「オクサ」ではなく、「モクサ」を記録した。(北尾 2018)

4-2. 星名にホシ(フシ、プシ)をつけて呼ぶということ

星名に「ホシ」とつけるとは限らない。南西諸島においてはフシ、プシ、ブシ等が分布する。また、星名に「ホシ」をつけないケースも広く分布する。たとえば、スバルボシと言わずにスバルと呼ぶ。仕事をしているときの目標として、星の名前を呼ぶとき、できるだけ短いことが好都合である。魚の名前がアジ、サバ、ブリ、タイ等のように2文字が多く、長くてもマグロ、カレイ、サワラ、スズキ等のように3文字であり、速やかにコミュニケーションできるようになっているのと同様、星の場合も、「スバルボシが出た」と5文字で表現するより、「スバルが出た」と3文字で表現するほうが速やかで確実なコミュニケーションが可能である。そもそも、人が言葉を生活に必要としたとき、それはできるだけ短いものであったのではないだろうか。星を認知し、それを言葉で表現し

たとき、短いほうが好都合であり、ホシをつけないのが本来であったという仮説を立ててみた。とすると、後の時代になって、ホシをつけるようになった。最初につけたのは、ホシであろうかフシであろうか、プシであろうか。東北地方においては、ホシあるいはボシであり、ボシの事例ははじめてである。

東北地方においては、ムヅラ、オクサ、モクサ等、生活のなかでホシをつけずに使用する星名が伝えられている。そして、厳しい寒さ、荒れた海にかかわらず、星を目当てにしている。とくに、イカ釣りの役星伝承を通して、広く伝播している。

4-3. 星見石を疑う立石

1979年、石垣島の星見石(北尾 2018)を石垣繁氏に案内していただいた。星見石が八重山だけに設置されているはずはないと調査地では似た立石がないか気にかけていた。宮古島荷川取の人頭税石、城辺の鬼の杵・神の杵という八重山の星見石に似ている立石について、黒島為一氏の研究(黒島1989)をさらに発展させていく必要を感じた。そもそも星見石をプレアデス星団との関連だけで論じては本質を見失う危険性がある。目的は、プレアデス星団等を目標にするための星見石として論じるとともに、立石を空に向かって設置されているシンボルとして捉え、それが後の時代に、鬼の杵・神の杵や人頭税や星見石が加わった可能性があり、もとは何かのシンボル、コスモロジーというか世界観、自然観、ことばを変えれば、宇宙に対する情念、包括的な認知の表現までさかのぼることを今後の研究課題としたい。

5. おわりに

2019年においても予想以上に記録できた。星名の伝承者のひとりひとり、調査に多大なご協力をいただいた田端研二氏、友利健氏、福里美奈子氏、古屋昌美氏、八重山・宮古地区の調査に同行いただき数々のアドバイスをいただいた宮地竹史氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。(8月の岩手県、9月の山口県、岡山県、8月、11月の沖縄県宮古島市、10月の沖縄本島、浜比嘉島、伊江島、12月の石垣島での調査は、JSPS科研費 JP19H00544の助成を受けたものです。)

参考文献

- 黒島為一:1989, 人頭税石? —八重山からの問題提起, 地域と文化(1989年、第52号)
- 北尾浩一:2015, 天文民俗調査報告(2014年), 大阪市立科学館研究報告第25号
- 北尾浩一:2018, 日本の星名事典, 原書房